

第3章 「和諧社会」の構築を正式に党議決定

1. 党16期6中全会における「決定」の審議・採択

(1) 党第16期中央委員会第6回全体会議(16期6中全会)は2006年10月8日から11日まで、中央委員195人、候補中央委員152人、中央規律検査委員会常務委員会委員と関係部門の責任者が列席して開催された。会議コミュニケによれば、会議は中央政治局が主宰し、胡錦濤総書記が重要講話を行うとともに、胡氏が中央政治局の委託を受け行った活動報告を聴取・討論し、呉邦国政治局常務委員が「討論稿」について説明を行った「社会主義和諧社会の構築についての若干の重大問題に関する中共中央の決定」を審議・採択した。

コミュニケは併せて、「党の第17回全国代表大会を召集することに関する決議」を採択したこと、同大会を2007年下半年に北京で召集することを伝え、「この大会は我が国経済社会の発展が鍵となる段階に入る際に召集される重要会議であり、我が党が全国各民族を団結・指導して小康社会を全面的に建設し、社会主義現代化の推進を加速する上で非常に重要な意義を有している」とし、「全党の同志が胡錦濤同志を総書記とする党中央の周囲に緊密に団結し、鄧小平理論と「三つの代表」の重要思想の偉大な旗幟を高く掲げ」「(胡氏が提唱する)科学的発展観を全面的に貫徹・実施する」ことを求め、「我が国を富強・民主・文明・和諧の社会主義現代化国家に建設するため奮闘しよう!」と結んでいる。胡氏が提唱する「科学的発展観」に基礎をおく「和諧社会」の構築を党内に徹底させ、そのことを中心に2007年秋の第17回党大会に向け、政権基盤をさらに固めていく方針を示唆したものであろう。

2. 第16回党大会の政治報告で初めて「和諧」を提起

6中全会における「決定」採択に至るまでの大まかな経緯を辿れば次の通り。これらの経緯から、江沢民氏から胡錦濤総書記への政権交代にあたり、「科学的発展観」に基礎をおく「和諧社会」の構築との考え方が、鄧小平理論や江氏の「三つの代表」思想の延長線上に位置付けうる指導理念として胡

氏の周辺で早くから準備され、将来的には、恐らく、胡氏が次世代指導者に政権を移譲するであろう 2012 年の第 18 回党大会において、党の指導思想として正式に党規約に採択されることを目指しているものと思われる。

(1) 2002 年 11 月に開催された第 16 回党大会は、1989 年 6 月の「天安門事件」直後の就任から 13 年間にわたり党・政・軍のトップの座にあった江沢民氏から胡錦濤氏（党中央総書記、国家主席、軍事委員会主席）への政権交代が実現した大会であり、江氏の提唱にかかる「三つの代表」思想が鄧小平理論に並ぶ党の指導思想として正式に採択された大会であり、また、江氏が党を代表して最後の政治報告を行った大会でもあった。

この報告では、2カ所で「和諧」への言及がなされている。1つは、本世紀初から 2020 年までの 20 年間に於いて小康社会の全面的な建設を呼びかける中で、6 つの「さらに」を強調し、「経済をさらに発展させ」「民主をさらに健全にさせ」「科学・教育をさらに進歩させ」「文化をさらに繁栄させ」「人民生活をさらに豊かにさせ」との表現に次いで、「社会をさらに和諧させ」と述べた個所である。2 つは、「三つの代表」思想を論述した段落で、「各々がその能力を尽くし、各々がその所を得、和諧しながら共生する社会関係を建設しよう」呼びかけた個所である。

(2) 「和諧社会」の構築を初めて完全な形で提起したのは、2004 年 9 月開催の党 16 期 4 中全会で採択された「党の執政能力建設を強化することに関する中共中央の決定」とされる。この「決定」では、党として全面的に高めるべき 5 つの執政能力を挙げているが、「社会主義市場経済を統御する能力」「社会主義民主政治を発展させる能力」「社会主義先進文化を建設する能力」「国際情勢に応じて国際事務を処理する能力」と並べ、「社会主義和諧社会を構築する能力」に言及し、初めて「和諧社会」の構築を提起している。

さらに前年 10 月に開催された党 16 期 3 中全会では、「経済体制改革を深化させる若干の問題に関する中共中央の決定」の中で「科学的発展観」の樹立を提唱しているが、「科学的発展観」と「和諧社会」との 2 つの概念は、「密接不可分の関係にあり、互いが他者の前提となり、保証となる関係であり、また、互いが手段となり、目的となる関係でもある」とされ、「胡錦濤同志を総書記とする新たな党中央が、第 16 回党大会報告の基礎の上に提出した、我が国の経済・社会の発展に関する新たな戦略的指導思想であり、実質的に

新たな時期、新たな情勢の下で中国の特色ある社会主義理論をさらに一步豊かに発展させたものである」としている。

